

「人間より下位」分類

ローマ教皇庁、胎児の実験は「新しく恐ろしい形」に発展すると語る

ローマ教皇庁は、人間の胎児を使った実験は、人間の「下位分類」を創り出すことにより新しい奴隷の形をもたらすことになるという。つまり、他人の目的を果たすために操作されたおなかの中にいる子どもたち、のことである。

人種差別に関する国連会議の前に公表された資料によると、教皇はかつての奴隷の子孫に対する補償問題についても重きをおき、該当する国々に過去の行為について謝罪することを提案し、だが一方で補償を算出するのは困難であることを警告している。

その資料は、『正義と平和』のための教皇評議会が作成したもので、南アで開催される8日間の会議のための意見書のようなものであった。そこにはローマ教皇庁の代表団も参加する。

このローマ教皇庁の資料は、「新しく劇的な差別の形」に対する懸念を表している。それには、実験及び技術的介入の対象としてのおなかの中にいる子ども」に対する差別も含まれている。

そしてそれは、人工生殖、「余分

な」胎児の利用、及びいわゆる「治療上のクローン」について言及している。

「ここには新しい人種差別の危険が潜んでいる。なぜなら、これらの技術の発展は、特定の人たちの利用を基礎とした人間の「下位分類」を作り出すからである。」とローマ教皇庁は語る。「これは新しく恐ろしい奴隷の形となるだろう。」

それは、各国政府や科学者に対して、遺伝子操作によってよりよい人間を創り出そうとする試みに大いなる警戒を促すものであった。「残念ながら、優生学への誘惑がいまだに潜んでいることは否めない、特に強力な商業的権益がそれを利用しようとする時にはなおさらである。」と述べている。

アフリカ奴隷の子孫に対する補償問題は、議論の中で最も意見の分かれる点

であった。

補償を支持する人々は、さらなる詳細の詰めが必要としながらも、最低でも補償の中にはアフリカの数十億ドルに及ぶ海外債務の取り消しや、社会、教育、健康におけるプログラムの資金援助が含まれるべきだと考える。

ローマ教皇庁の資料は、補償の算出は困難だとしている。そして「間違いをおかした国が犠牲国に対して謝罪の意を表すこと」を提案している。

米国は、この会議にハイレベルの代表団を派遣するつもりはない



今、
地球上の国々が立ち止まり、
約束を交わさなければ...

し、もしかしたら一切参加しない可能性もあるのだが、奴隷制度に対して謝罪の意を示すことが無数の補償請求への扉を開けてしまうことになるのを恐れている。

この資料は、「このような複雑な問題に対して法律上の解決策を提案する」のは教会の役目ではないとしながらも、この問題を貧富の激しい国々への対処の必要性に結び付けている。

そこには、「教皇は、補償の必要性が発展途上国に対する大きな支援を与える義務、つまり主に先進国に課された義務であることを増強するものであることを強調したいと願っている」ことが示されている。

ローマ法王ヨハネ・パウロ2世は任期中、和解を最優先課題としており、ローマカトリック教会がユダヤ人や東方正教会などに行ってきた過去の振る舞いについて遺憾の意を表明している。また、一九九二年のアフリカ訪問の際に、彼は奴隷売買にかかわったキリスト教信者への許しを求めた。

永遠のいのちのために

夫のビルに話しをする時の担当医の声は穏やかだった。「お母さまの検査結果を見ました。結腸にできた腫瘍は悪性ですが、手術をすれば大丈夫でしょう。むしろ、レントゲンの結果、肺にも何か点が見られません。ガンはただの転移ではなく、肝臓を飛び越えてしまったようです。」それを聞いた後、夫は二人の兄弟に電話をした。

ガン、それは義母がずっと恐れてきたものであった。

義母は、自分の病状について決して何事も隠すことのないようにと私たちに約束させていた。夫と二人で病室に入ると、彼女は自分からその話題を持ち出した。「医者はガンだと言っているわ。現実には目を向けなければ」と言った。そして少しの間沈黙したのち、「覚悟はできてるわ」と付け加えた。

義母と三人の息子たちは、担当医の忠告にしたがって科学療法は受けなことに決めた。彼女は手術後にだいぶ回復し、体力も戻り家に帰ることさえできるようになった。

手術から三ヶ月、九月月上旬

に義母はわが家へ帰ってきた。荷物の整理を手伝っていると、私たちの長男が四月に結婚式をあげた時、義母が着た柔らかな青いドレスが出てきた。私はそれをクローゼットにかけたのだが、その時レースのジャケット部分に鉛筆で書かれたメモがついているのに気がついた。「私を埋葬する時、この服を着せてください。」私はこのことをあまり考えないようにしようと努めた。

義母は検査のために病院へ戻った。待合室で待っている間中、彼女は、きっともう完全になくなっていて、すべてが良好だと言ってくたさるはずよ。」としきりに話していた。私はそこまで楽観的にはなれなかったが、彼女を落ち込ませないように気を遣った。

検査室に入ると義母は担当医に、「良くなっていますよね？」と問いかけた。彼女を納得させるため、医者はレントゲンをとった。医者は穏やかな口調で、「あなたの肺はガンで覆い尽くされています。良くなることはないでしょう。」と告げた。義母は私の肩に寄り掛かり、泣いた。

彼女の死との闘いは本格的に始まった。しばらくの間は自分のことは自分でできたのだが、徐々に人の手を借りなければならなくなった。ついには、この78歳の老いた義母は子どもと孫に完全に頼らざるを得なくなった。義母が入浴するのを手伝ったある朝、彼女が一通りの手順を終えるのを見てみると、これが尊厳ある死といえるのだろうか？と疑問がわいてきた。答えを出せないまま、それから三ヶ月の間その疑問が常につきまとった。あの朝の衰弱しきった義母には私は何の尊厳も感じることができなかつたのである。

夫は、息子である自分がすることになるうとは想像もしなかつたような役割を果たしていた。ベッドに横たわる母親を起こしたり、向きを変えたり、鎮痛剤の注射を打ったり、あるいは、「どうして？」という延々と続く質問に答えたりということである。

義母は敬虔なクリスチャンだった。しかし、病気が進むにつれその自信もなくなっていく。彼女は何度も祈りを捧げた。信

じる気持ちを失ったことはなくとも、身体の不調から自分の魂を裏切らなくてはならないこともあった。義母は死を恐れていたのではない。死に至るまでの過程を恐れていた。

心も身体もだいぶ楽になると、義母は自分の子どもたちの思い出にひたっていた。彼女の父親はとて勤勉な人で、子どもたちにも強い精神力を持ってものごとにぶつかっていくことを期待した。幼いころの義母の早朝の仕事は、「火をおこすこと」だった。これは彼女の性格を映し出すものだった。

今までは疲れ知らずだった義母はすっかり自分の子どもたちに面倒を見てもらっている。私は自分の子どもたちがどんなふうに私に頼っていたかを思い出してみた。おむつをかえる時も、子どもを侮辱するような感覚はまったくなかった。義母をお風呂に入れることはそれに比べると尊厳がないことなのだろうか。私につきまとっていた疑問への答えが少しづつわかってきた。

10月中旬になって一週間の出張から戻った夫は、母親のあま

りの衰えぶりに驚いた。その日彼女は正しい薬の飲み方を思い出すことができなくなっていた。彼女は私たちに薬の調合を頼むと言った。それからどんとんと彼女の現実離れは進んでいった。

夫は、母の部屋につないだインターフォンに頻繁に対応した。ある夜、義母の部屋から聞こえてきたベッドの柵の力チンという音で私たちは目を覚ました。それはちよつとおかしな出来事だとわかった。義母は起床の間、寝間着を脱ごうとしていたのである。音を聞きながら、私は彼女が着替えている洋服の数を数えていた。そして夫が着を片づけたかと思うと次の服を着ようとしている様子を思い、夫の驚いた顔を想像するのであった。しばらくしてやつと彼女は再び眠りについた。

部屋に戻ると夫は、無表情を装いながら言った。「母が今何を着ているか絶対にわからないだろう。一番最初に脱いだ寝間着を結局着ているんだ。」私たちは暗闇の中で笑っていた。

この感覚の喪失は、病気に冒された身体がいかに人間の中心までおかしくなるかを物語る一つの例でしかないことがあとになってわかった。このような混乱した状況が、末期症状にはよ

くあることは知っていたのだが、それにどう対処していくかはまた別の問題だった。次のようなやりとりの中で私たちは学んで行くしかなかったのである。

義母は親戚や友達の話をよくした。ミシシッピーの人であろうと、カリフォルニアの人であろうと、はたまた天国にいる人であろうと、みんなが自分の近くにいるような錯覚を起こしていたのである。ある朝彼女は私に對し、「服を着替えてトム(彼女の夫)に駅で会わなくちゃ。彼が私を待ってるの。」と言った。

トムはもうこの世にいないのだと言うと、彼女はシヨックを受けた。このように現実に突然引き戻すことは、今の彼女の状態にはあまりにもきつすぎて、混乱を増幅させるだけであった。「一度に一日だけを生きよう。」というのがそれからの私たちのモットーになった。それを心がけながら一日のスケジュールを考えた。義母の食事の習慣が変化した。昼と夜とが逆さまになった。昼の寝間着のように、好き嫌いがしょっちゅう入れ替わった。

彼女の容体が悪化しているのを見て、夫は弟たちに電話をしてわが家で早めの感謝祭をやることにした。これが最後の家族団らんとなったわけだが、夕食



のテーブルを囲んでターキーやコーンブレッドのドレッシングなど、義母が昔教えてくれたメニューをみんなでおいしく食べた。せつかくの楽しい集まりでも、彼女の食欲はあまりわかなかった。突然彼女は自分のフルーツサラダの中に入っていた小さな色付きのマシユマロを食べ始めた。すると次には自分の長男のお皿にまで手を伸ばし、彼のマシユマロをつまみ出した。長男は喜んで、みんなのサラダからマシユマロをつまみ出し、彼女のお皿にこっそり追加していった。

義母の容体は急速に悪化していった。心臓には重たい負担がかかっていった。呼吸が難しくなったため、酸素を取り付けることにした。眠りにつくのも大変になった。彼女は私たちにそばにいてほしいと訴えた。私たちはそばにいてただ祈るだけだった。これが彼女の最後の日になるのではないかと毎日思った。

クリスマス・イブを迎え、義母

は私たちと一緒に居間でクリスマス・キャロルを歌った。ところが翌朝、私たちが彼女の寢床にプレゼントを持っていくと、彼女は一体それが何のためなのか理解することができなかった。「お正月まであとどのくらい?」という疑問で新年は明けました。義母に「明けましておめでとう!」と言っても、彼女は困惑した表情を見せるだけであった。

その夜から、夫は母親の寢室に布団を敷いて寝ることにした。そのころ彼女はうなったり叫んだりして、ほとんどの間目を覚えていた。痛み止めの注射を打つ回数が増えるにつれ、彼女がやすらぎを感じる瞬間は減っていった。

一月九日は日曜日で、義母が最も好きな曜日だった。夫は教会で授業を受け持つ日だったので、私が家に残った。義母は日曜日であることを悟っていたので、何か特別に欲しいものがあるかどうか私に聞いてほしいとせがんだ。私は私に歌ってほしいとせがんだ。聖歌は常に彼女に大きな喜びをもたらした。聖歌集を持ってきて、彼女の枕元で歌い始めると、彼女も数ヶ所一緒に歌った。私はすぐに疲れてしまったのだが、彼女は目をぱちりとあけたままだった。

夫は帰宅するやいなや、母に痛み止めを打った。彼女が眠っ

ている間に私たちは夕食をとった。夫もほとんど一晩中起きていたので、すぐに休んだ。

あの日の義母はいつもと違っていた。後に夫に報告したが、あの日の彼女は一定の動きと同じ会話をずっと繰り返していた。「彼女は、【火の当番をしているがごとく】ものごとをこなしていたの。きつとこういうふうにして彼女は死んでいくんだわ。」と私は夫に言った。

夫が母の部屋へ入ると、彼女はもう一度注射を打ってほしいとせがんだ。「大きいのをね。」と言って、彼女は少し落ちついた。

一番下の息子のトムが大学から帰ってきた。夫が自分の兄弟たちに電話をしている間、息子と私は話をしながら義母を見ていた。何か欲しいものはないかと彼女に聞くと、すぐに「ええ、フライド・チキンが食べたいわ。」という返事が返ってきた。私がすぐに台所に行かないのを見ると、義母は弱々しい声で、「ねえ、あなたが持ってきてくれるの?それとも自分で用意してくちやいけないの?」と言った。私は彼女が日曜日の夕食には南部のフライド・チキンをよく作っていたことを思い出していた。

息子と私は窓の外を眺め、急に雨が降りだしたことを知った。振り返って義母を見て、私は叫

んだ。「トム、お義母さんが息をしないでいいわ!もうだめ。早くお父さんをお呼びして!」

「僕は走って父をお呼びしてきました。」とトムは振り返る。「僕たち三人は最後の数分間を祖母と一緒に過ごしました。彼女は息をしようとおえいでいきましたが、ついには落ちつきました。死んだのです。僕の目の前で。父は、「母に祝福あれ。」と言いました。」

おそらく尊厳ある死というのは認め受け入れることにあるのかもしれない。入院中に彼女は「覚悟はできている。」と言ったことがある。きつと彼女は、死という肉体の裏切りにもかかわらず、神のみが最後の言葉を下さることを知っていたのだらう。

私は担当医と葬儀屋に連絡をとり、用意するようにいわれたものを集めた。私はクローゼットを開け、義母の青いドレスにまだ手書きのメモがついているのに気がついた。「埋葬するときはこの服を着せて。」

いままで何度あのメモを見、その都度それを忘れようとしたことだろうか。今ではそのメモが私をなごませてくれている。彼女は自分の葬儀のためにあの服を用意しておいたのだが、同時にこれからの永遠のいのちのために用意していたのである。

アン・コーカー

アリスの場合

8歳の頃の私は人騒がせな小娘だった。60年代、親達も「開かれた結婚」(配偶者以外と肉体関係をもつ意)に興味を示し、物事は実際に体験した上で信じようという風潮だった。そんな中、私はある若者と深い仲になり、彼の側にいたために大学もやめた。そして、一ヶ月もしないうちに妊娠に気づいた。

この世に生まれる子ども達すべてをいづくし、貧しい人達や追いつめられている人達に手をさしのべ、子どもを育てるか否かを含めて女性に選択権があると考えて、自立心の強い性格の私は、将来は医学を専攻するつもりでいた。何の疑問もなく、自分は中絶すべきと思った。彼を私をとて愛していてくれたが、彼にも将来の目標があったし、私と暮らすためにアパートを借りて引越すだけの経済力もなく、子どもを育てていくなど到底無理だった。

病院に電話で中絶の問い合わせをしつつも、日々大きくなる胸元に、赤ちゃんについて夢見がちに空想をしてみたり、食欲はいくら食べても足りないほど

旺盛だった。胎児がどんな様子かを想像し、名前を考えてみたりしながら、おいしそうな料理のレシピを書きとめたりしていた。妊娠日が分かっていたし、自分はまだ10週目とのんきに構えていた。しかし、妊娠周期は最後の生理日から数え始めるものだとは知らなかった。ようやく病院に予約を入れた時は12週目に入っていた。最初に「カウンセリング」もあったが、もう中絶すると決めたとし、他の選択は考えられないと答えた。それが正直な気持ちだった。赤ちゃんをとても愛していたため、産んで悪い母親になってしまったり、誰か他人に預けることで傷つけたくなかった。神の愛など思いもよらず、すべて自分でやるしかないと考えていた。その日のうちに迷うことなく中絶手術をうけた。

それまで経験したことのないような痛みが身体を襲った。手術の仕組みを頭で分かってはいたつもりでも、赤ちゃんの死の現実に心がついていかなかった。手術後しばらくひとりになった時、胎児が入れられたふた付ガラス容器の上の布をそっとはずしてみた。そこには安らかに眠る小さな赤ちゃんがい

て、私はお別れの挨拶をするつもりだった。無論そんなことができる訳がなく、代わりに赤くどろどろした塊を見た。かつて味わったことのない心の痛みを覚えたが、それでも見てよかったです。激しい後悔と理解が瞬時にやってきた。自分がこの上なく愛し守りたいと願っていた赤ちゃんを自分の手で死なせてしまった。

だがその理解もその場限りで、自分でも何て気分屋だろうとあきれかえる。ひとりで大丈夫だからと出てきたのに、彼がそこにいることに腹を立てていた。そして、まるでなくした子どもが戻ってくるかのように、彼と私は、いつか子どもを持てるようになったら何て名づけようかなどと話し合うようになった。

私は大学に戻って卒業し、医療専門学校に通いはじめた。そして一ヶ月、21歳の時、またも妊娠がわかった。ショックで落ち込んだのも最初の数日間だけで、すぐに同じ失敗をってしまった。自分への怒りへと変わった。自分の身体をコントロールできない自分を責めながらも、妙に素早

く中絶の予約を入れた。今度は彼に車で送ってもらい手術にのぞんだ。薬のおかげで痛みもなくて、手術もいつのまにか済んでいた。けれど、空しさだけが残った。

最初の中絶以降、不気味な夢を見たり気が晴れないことが多かったが、二度目の中絶をした昨年11月は最悪だった。つきあっていた一年になる恋人との関係も終わった。研修期間に入り、週末のみの短期セラピー治療をしながらも、自分が赤ちゃんを失った悲しみにひたっていた。

しだいに患者の悲痛を緩和することにやりがいを見出し、自身にもいくつかの具象化技術を用いて中絶をあえて思い出した上で癒すという方法をとった。そして、自分では「すっかり片づけた」つもりでいた。だから、中絶をした女性はそれ以上に心的苦痛を持つことはないという古くからの教えに反して、その事実とずっと向き合っていないか、悩まないとことを体験し驚いた。

私の場合、必要以上にすっきり片づけすぎたのだが！
その後、今の夫と出会い、関係が深まって結婚して子どもを持つということが現実味を帯びてくるに従い、死に関する悪夢を見るようになった。それでもなお、理由が飲み込めなかった当時の私！その後結婚して子ども

も二人できた。けれど、子どもが生まれて、自分の中絶して亡くした子は決して戻ってこないということに、突如気づいた。目の前のふたりはそれぞれ全く別の人格とこれまでにふたつとない魂をもつ人間であるのは明らかである。新米母として生きる一方で、過去の悲しみにも直面しだした。

とても耐えられそうになかった。過去の中絶が自分の中にどれだけ大きな病巣となっているかを気づかせてくれる精神的支えもなかった。三年ほど続けたセラピーもしだいに悪い方向へ向かい、自分が子ども時代に家族からひどく虐待を受けていたせいだと思ひ込むまでにいたった。私が直面する怒りや不安や悲しみは、誰かが自分や子ども達を傷つけているとの妄想として現れた。現実から目を背けていた。

辛いなことに、私は現実にいるふたりの子どもをとて愛していたし、彼らの精神的成長をも望んでいた。夫の子どもの頃からの信仰と出会い、私も洗礼を受けてクリスチャンとなった。長い精神的迷い道を経て、ようやく神の存在に気づいた私は、まず真実を求め、次に自分の妄想を許し、そしてぞんざいな育て方をした両親を許した。

それでも今なお悲しみは尽きない。子どもはもつと欲しいけれど悪夢にうなされ、セックスに前向きになれない。神の義を受け入れながらも、こと中絶に關しては苦悩から解放されないのは一体なぜ?そして、最近気づいたのだが、自分はこれまで二度目の中絶に目を向けてこなかった。二度目の妊娠は、最初の中絶を忘れるための手段でしかなかった。感情の動きを自ら制御し、最初の中絶の再現としか考えないようにしてきた。今、やっと目を向けて一度目同様に失った存在の大きさを自覚している。道のりはまだ遠い。子をなした母の悲しみが決して完全に癒されることなどないと知った今は、神に私の「不治の病」を癒して下さいと祈っている。時々、イエスが死んだ時の聖母マリアの悲しみはどれほどだったかと考えることがある。また、『後の世界』で亡くなった二人の子に会えるという希望も持ちはじめた。

セーフ・ハイブーン・プロライフ・グループ

中絶のあと
残ったもの...

それは
空しさだけだった

歪んだ精神

フランススコ修道会士であるマウリツィオ・P・ファジオーニは次のように語っている。「人間の胎児に手を加えるという行為は、それを許す常軌を逸した法制度と同様に、数多くの人工生殖(特に体外受精)の施術を實行に移させるような歪んでしまった精神構造の現われである。配偶者との具体的な愛の表現方法と種の保存との間の破つてはならない関連性を破壊するような行為は、新たな人間を誕生させるという深遠な意味をも曖昧なものにしてしまう。それ故に、体外受精を行なう事、また、そこまで行かなくとも低温保存によつて可能となる予備の受精卵の生産を故意に行なうことは、正しい行為ではない。これは胎児の冷凍に關する疑念に対しての唯一筋の通つた考え方のように思われるし、また、神父が科学者達に抗議を続けているのはまさにこの点についてなのである。しかしながら、この胎児が不自然な方法による受胎の産物であるうと、また不自然な状態で現存していようと、彼らが創造された人間であり、イエスキリ

ストの象徴として創られた神からのいのちある贈り物である事を我々は忘れてはならない。」

「冷凍胎児の件に關しては、人類のために本当に良い事よりもむしろ個人的な利得の為に、また、道理ではなく欲望の為にだけ利用された場合に、科学的知識がかえつて解決が困難な迷路へと入り込ませてしまつていふわかりやすい事例がある。こうした生と死に關わる問題の重要性に直面し、キリスト教信者は、生命の絶対的真理を示すという神から委ねられた使命を今まで以上に実感する事であろう。かくして彼らは、台頭しつつある問題に關する解決策を導くべく、善い意志を持った人々と共に対処法に取り組む事を決意した。それは、必要とあらば大胆に、その一方で、その問題が弱者や少数派の権利に關するものであるときには特に、人間の価値および人間が生まれながらにして持つている権利に絶えず敬意を払いながら行なうべき事である。」

(ロゼルバートレ・ロマーノ)

96/8/21)

隠されている中絶と

乳ガンの関連

中絶と乳ガンの関連を指摘している最新報告の発表の結果として、アメリカン・ライフ連盟は、アメリカの医療専門家とメディアに事実を認めるように圧力をかけています。イギリス王立大学の産科医と婦人科医による2年間の研究の結果、アメリカの研究結果を無視することができないという見解はイギリスのデイリー・エクスプレス紙による報道で広く受け入れられ、そしてそれは、医療の専門家によつて社会的衝撃が生じるであろうと予想されます。

それゆえに、アメリカン・ライフ連盟会長のジュディー・ブラウンさんは次のように問いかけています。「もし、イギリス王立大学の産科医と婦人科医が中絶を受けた女性は乳ガンの危険性

が高くなることを認めているならば、なぜ、アメリカの大学の産科医と婦人科医はそうしないのでしょうか?もし、ロンドンのメイル紙とオーストラリアのヘラルド・サン紙がこの危険性について見出しとして扱うなら、なぜ、ニューヨーク・タイムズ紙やワシントン・ポスト紙で扱わないのでしょうか?」中絶産業を保護することに熱中しているために、ビッグ・アポーション会社は中絶と乳ガンの関連についての科学的な証拠を隠すために、すべての利用可能な手段を探しています。ブラウンさんは、妊娠中絶の重大さについての真実を報告し始めることをアメリカのメディアに強く勧めるといふことを付け加えました。

(Medical Files, Aug 22)

ビデオ
「沈黙のさけび」を見て

顔の違い

私はビデオを見ていて、赤ちゃんがお腹にいて、最初に寝台に乗って胎児の姿をエコーみたいなもので見ている幸せそうな母親の顔と、一番最後に中絶をし終えた女性達の顔との違いに、心が打たれました。

いのちを宿している女性の顔はどうしてこのように輝いているのでしょうか?

いのちを無くした女性の顔はどうしてこのようにうち沈んでいるのでしょうか?

Y・Rさん(高三生)

プロ・ライフ資料紹介

【410】 **ピル先進国** **英国からの警告** (partII)

「生命尊重」学習ビデオ

(社)日本PTA全国協議会推薦

28分 ¥15,000

先月に引続きこのビデオについて紹介致します。

ハンナ・マリニア-ブさんは結婚前にピルを飲み始めました。少しして、気分が悪くなったので、看護婦に告げると、ではこちらに変更しましょうと言って、別のピルを処方されたといひます。そして、今は血栓防止薬を一生飲み続けなければならない体になってしまい、日常の生活にも支障をきたしています。

エレン・グラント医師は、世界中の人口問題を解決し、沢山の望まない妊娠を防ぐと信じてイギリスにおける初めてのピル投薬テストに参加しました。しかし、若い女性に有害という結論に達して、今はピルの危険性を訴える医師の一人となりました。彼女の著書『ピル-経口避妊薬の落とし穴』という本は日本でもメディカル社から出版されていますから、あわせてお読みいただければ更に良く理解できると思います。彼女は、「低容量のピルは安全と言われますが、決してそうではありません。ホルモンの量があまり少ないと避妊効果がありませんから、ある程度の量がなければなりません。低エストロゲンの量が少ない分、プロゲステロゲンの量が多くなります。それは高エストロゲンのピルより危険なのです。なぜなら、子宮ガンや乳ガンの原因となっているのですから。」とビデオの中で述べています。

また、英国政府環境機関、国立漁場研究所はローチという魚の精巣を取出して、その組織を顕微鏡で私達に見せてくれます。驚いたことに卵子が精巣をうめつくしているのを見ることが出来ます。雄の雌化なのです。それで、英国政府環境機関・環境毒性学マネージャーのジェフ・ブライティ達が、どうしてこのようになったのかを調べ始めました。それで分かったことは、人間の体内で作られる天然ホルモンであるエストロンとエストラジオール以外にエチニールエストラジオールがその川の水に残っていたのです。それはピルに含まれている人工ホルモンでその中で生きている魚にこのような雄の雌化と言うような現象を引き起こしたのです。また、ねずみの実験でも合成ホルモンがいかに雄の雌化に関わっているかを知ることが出来ます。生まれたばかりのねずみは人間でいうと妊娠12週から16週に当たることですが、それらの生まれたばかりのねずみにたった五日間合成女性ホルモンを与え、二ヶ月後成長したねずみに何が

【511】 **赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅**

【515】 **経口避妊薬：ピル**

注文：	1 - - - - - 5	1部 = ¥100
	6 - - - - - 20	1部 = ¥75
フルカラー	21 - - - 999	1部 = ¥50
	1000 - - 以上	1部 = ¥35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

起こったか、顕微鏡で見ると、精子がほとんど見られないのです。一見健康そうに見えても、そのねずみはもう二度と精子は作られないのです。魚やねずみに起こったことが、人間には起こらないと誰も言うことが出来ません。

胎児が成長して行く過程のどの時期に母親が化学物質のピルを飲むと、胎児のどこに異常が出てくるかをあらわした表も見る事が出来ます。

マーガレット・ホワイト医師は自分の患者の中でピルを服用していた女性から生まれた男の子の生殖器が小さかったことを証言しています。また、英国では毎年180人の人が、ピルを飲んだために亡くなっていると言われていています。そして最近、ピルに関する訴訟問題が起こっていると弁護士のジェイミー・ボーグルさんは伝えていています。

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文 無料 + 郵送料

【カラー・パンフレット】

- [201] 生か死..... + 郵送料
- [202] 第二の処女生..... + 郵送料
- [203] デート..... + 郵送料
- [204] どうするの?..... + 郵送料
- [205] "NO"という技術..... + 郵送料
- [206] テイーンの出産コントロール..... + 郵送料
- [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
- [208] していましたが..... + 郵送料
- [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
- [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
- [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

- [301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
- [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
- [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
- [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料
- [306] ミニソフィア Ace エース(税別).....7980円 + 郵送料

【ビデオ+本・日本語】

- [401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [403] ビリングス・メソッド.....(VHS/Beta)....7000 + 郵送料
- [404] いのちーおくりもの.....(VHS).....13000 + 郵送料
- [407] 命美しいもの = one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
- [409] 聞こえる?天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
- [410] ピル先進国・英国からの警告...(VHS)...15000 + 郵送料
- [411] (コース・セミナー) **エイズ時代の性倫理**...(VHS)...3800 + 郵送料
- [500] (本) 生命問題に関する...(カトリックの教え)...2987 + 郵送料
- [501] (本) 自然な家族計画...(ビリングス・メソッド)...1000 + 郵送料
- [503] (本) プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
- [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
- [505] (本) いのちをみつめて.....500 + 郵送料
- [506] (本) 命あるすべてのものに(マザー・テレサ)....660 + 郵送料
- [507] (本) 私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
- [508] (本) いのちの福音.....1500 + 郵送料
- [509] (本) 小さき生命のために.....1300 + 郵送料
- [511] (本) **赤ちゃん：最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料**
- [512] 本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
- [513] 本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
- [514] 本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
- [515] (本) **経口避妊薬：ピル**.....100 + 郵送料
- [516] (本) いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料
- [517] (本) **フマネ・ヴィテ**.....300 + 郵送料

(本) フマネ・ヴィテ

1 ~ ~ 30	1部 = 250円
31 ~ ~ 100	1部 = 200円
101 ~ ~ 以上	1部 = 150円

パンフレット申し込み

1 ~ ~ 5	1部 = 35円
6 ~ ~ 100	1部 = 25円
101 ~ ~ 500	1部 = 20円
501 ~ ~ 以上	1部 = 15円

は自由です
組み合わせ

十代の性

(23)

質問一：中絶って何ですか？

答え：中絶は人工妊娠中絶や妊娠中絶、または墮胎と言われます。中絶とは妊娠している女性が、手術や薬を使った方法で、子宮の中で育っている赤ちゃんを取り除くことです。一部の人は、中絶を「妊娠の終結」と呼びますが、それは不完全な説明であり、真実を伝えていません。なにしろ、赤ちゃんの出産だって妊娠を終結させることになるのですから。もっと真実を現わした説明といえ、中絶とは殺すことです。胎内の赤ちゃんを殺すことなのです。

質問二：いくつかの国では中絶が大きな問題になっていると読みました。中絶に関する議論の背後にある本当の心配とは何ですか？

答え：多くの人が心配しているのは、中絶が、罪のない人間を殺すことであるからです。何かの理由があるからといって、このような殺人が許されてもいいのでしょうか？中絶の問題の核心には、人間のいのちの価値をどう計るか、という問題があります。人間のいのちの価値は絶対的価値なのか、相対的価値なのか。もし絶対的価値があるならば、罪のないいのちを殺してしまう権利は誰にもありません。もし相対的価値ならば、他の基準によって価値が左右するでしょう。そうすれば、ある人は生きる価値がないと判断され、その人を殺す丁度いい「理由」ができるわけです。それで多くの国では中絶が、自然な流れとして幼児殺しや安楽死へとつながっていくのです。

中絶によって、私達の住む社会がどういう社会かという問題も出てきました。私達は胎児を含めて自分のことを守ることが出来ない人を、出来る限り守って面倒をみてあげるべきなのか？それともジャングルでの掟のように、強い物がその価値観を押し付けて、弱くて声を上げられない物は無力なのか？生きる権利というのは、すべての人間にとって、一番基本的な権利です。この生きる権利が守られていないのに、人権や高度社会などについて話すのは、偽善になるでしょう。

Q & A

平和を破壊するいちばん恐ろしいものは墮胎です。なぜなら、子どもを殺すのはその子の母親自身だからです。…若い女性達は両親を恐れ、世間の人々を恐れるあまりに、墮胎することがよくあります。でも彼女たちを助けなければなりません。(マザー・テレサ)

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-31

電話 / Fax 088-873-3619

e-mail: prolife@i-kochi.or.jp

For English Speaking People / evening: Tel/Fax: 088-843-0406 Email: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円

一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

事務所時間:

月一金 10:00 - 17:00
土曜日 休み
日曜日 休み

御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店

口座番号: 0573553

日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局: 「郵便振替」

現在口座番号: 01660-5-39607

日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

学校では新しい学年が始まり、社会では新入社員の方が仕事場でも働く時、木々の葉っぱもみずみずしい緑で声援を送っているようです。

この日本プロ・ライフ・ニュースは一九八七年十月に皆様にお送りし始めた時から、多くの皆様にお読みいただいております。そして、その間、多くの善意ある人々に金銭的・活動的にこの運動を支えていただきました。有難うございます。御自分の分だけではなく、誰かの分まで御支援下さる皆様のお陰でPR分を、特に公立の中・高等学校と産婦人科にローテーションを組んで送ることが出来ています。そして、代表者のオブレート会司祭・ノボトニーは高知大学に勤める傍ら、事務所の金銭的支援と指導をしておりますが、あと一年で高知大学退職となります。退職すれば、指導はもつと出来るようになるでしょうが、困ることは金銭的なことです。それで今まで金銭的に一度も支えていただけていない方々に順番に郵便振込用紙を入れさせていたいただきたいと思っております。上記の番号 01660-5-39607 と名義のところに日本プロ・ライフ・ムーブメントと御記入の上、どうぞお気持ちを贈り下さいますようお願い致します。(こちらで番号を書いてしまうとこんなにも請求が来たのかとドキッとされても困りますので。ある方はびっくりされて電話がかかって来ました。)

また、時々、切手でお送り下さる方もいらつしやいました。切手はもう使わないのですかとの問い合わせがありました。沢山の部数を送る時には切手を使用しておりますので、どうぞ、引き続きお願い致します。

また、書き損じの葉書をお送りいただければ、こちらで切手に交換出来ますので、そのこともどうぞよろしくお願い致します。

日本プロ・ライフ・ムーブメント